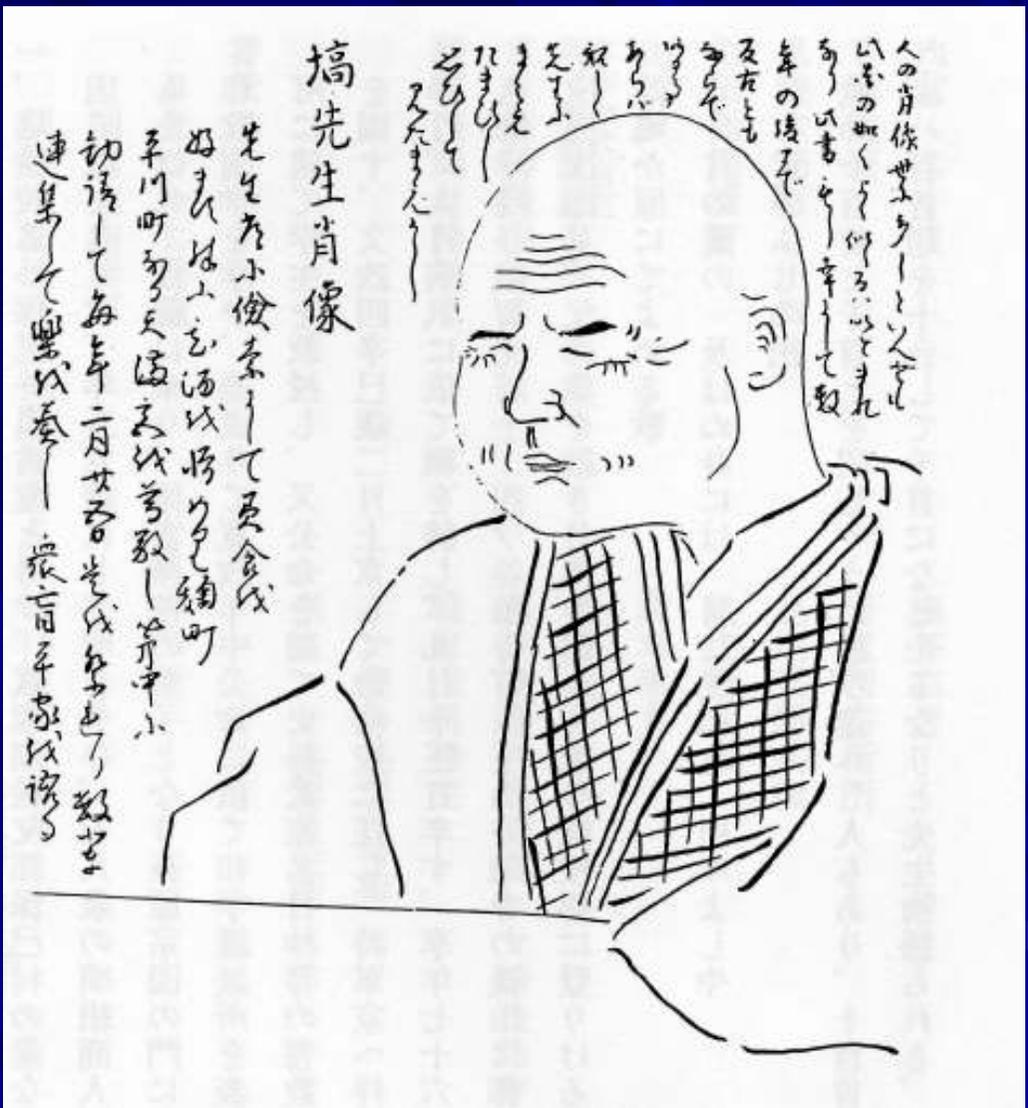


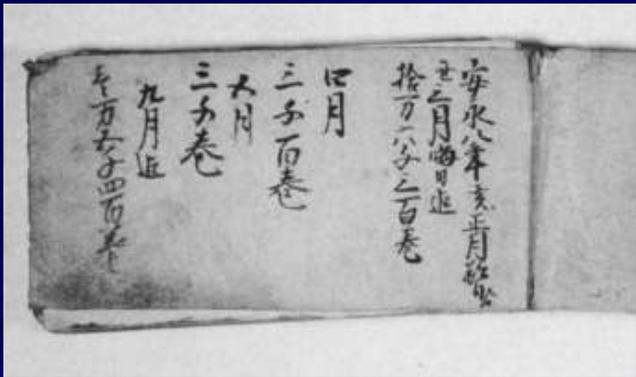
# 二 塙保己一の人物像



先生常に儉素にして美食を好まず、  
殊に甚だ酒を憎めり

森観齋の描く保己一像

温古文書(



般若心経巻数帳

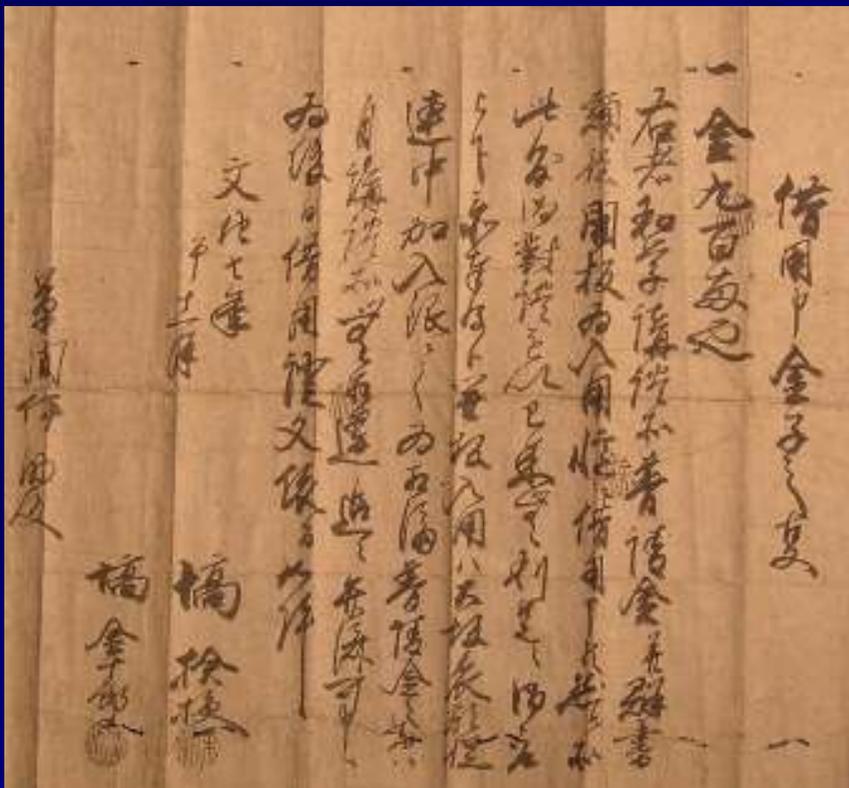
われすこしの財をだに持得ずして、  
勾当の職にもなりにたり、これまさ  
しく天満宮の御はからひにして、心  
経薫陶の効力なるべし、猶二千日の  
願を起しなば、検校の職にもあがり  
なんことかたかるべからず、  
しかれども

そは一身のはかりごとぞかし。  
あはれ世のため後の為にもな  
らんことをなしてん、

「温故堂塙先生伝」 中山信名

世の検校は咸な金あり。ことに総録ともなるものは、大福有なることは、皆人知る所なり。然に大人は恒に一銭の蓄はひもなきのみか、数千両の借財ありき。大阪の鴻池に二千両、同処千葉屋安兵衛に二千両の負債ありしと。是れ皆毫厘も他事に費したるはなく、悉く群書類従刊行其他書籍の上に用ひしなりと。

〔「水母余音」意識 太田善麿〕



## 坂本太郎氏の人物評

この事業が世のため、後のためという崇高な精神のもとに行なわれたという点である。

勾当になり、検校になることは、一個の栄達のためである。けれども、古書を集めて出版することは、盲人にとって何の栄達のたしにもならないであろう。また、出費をこそ招け、財貨を得るゆえんでもなからう。世のため、後のためという伝の所説は、恐らく真相を得ているものと思う。

検校は、どうしてそうした公共の利益に奉仕するという大願を立てたのであろうか。

普通ならば、不具となった身をはかなみ、世を呪い、世に背かないまでも、白眼視して一生を送る所であろう。せめて利殖にでもはげんで、小金をため、目明きの鼻をあかしてやろうと考えるくらいが関の山であろう。

（「塙検校

の識見」 坂本太郎）

## 福沢諭吉「学問のすすめ」

### 権助論

然りと雖ども事の軽重は金高の大小、人数の多少を以て論ず可らず、世の文明に益ありと否とに由て其軽重を定む可きものなり、然るに今彼の忠臣義士が一萬の敵を殺して討死するも、この権助が一兩の金を失ふて首を縊（くび）るも、其死を以て文明を益することなきに至ては正しく同様の訳にて、何れを軽しとし何れを重しとす可らざれば、義士も権助も共に命の棄所を知らざる者と云て可なり。

是等の挙動を以て「マルチルドム」と解す可らず。余輩の聞く所にて、**人民の権義を主張し正理を唱て**政府に迫り其命を棄てて終をよくし、世界中に対して恥ることなかる可き者は、古来唯一名の**佐倉宗五郎**あるのみ。



第一国立銀行関係者

三井家と渋沢栄一

## 渋沢秀雄

「第二次大戦の敗戦後、進駐軍が行なった財閥解体の折、資本金 一千万円、内払込金六百二十五万円、その株主は渋沢同族で構成される七家という渋沢同族株式会社を、財閥のハシクレに加えたが、調査の結果、財なき財閥であることが判明し免除された。」

五百以上の営利事業に関係した父が、もし「**一家の利殖に専念したならば**、三井・岩崎に負けない富を築くことも夢ではなかったと思う」

不儀ニシテ富ミ且貴キハ 我ニ於テ浮雲ノ如シ

『論語』

(赤間倭子)

世のため、

後のために



埼玉県人の気風？